

## 9 私と妻

十年前、アラフオーの頃、脳性麻痺の私は歩行の際、足が前に全く出なくなり横歩きで2、3歩進むのがやっとだった。外出時は、妻に手を引いてもらっていた。

その妻も股関節脱臼を悪化させ、外出に車椅子を使うようになった。二人での外出は、私が彼女の乗る車椅子を押している。外出途中に親切な方が、私に代わって車椅子を押そうとされる。彼女は、その親切な方に言う。「車椅子が主人の杖代わりになっていきます」

外出時に妻の乗る車椅子を押すことよって、私の足腰は格段に鍛えられた。身体全体の骨格ができ、手の不随意運動(震え)も少なくな

った。五十歳を過ぎた今が、歩行時に足が一番上がっている。脳性麻痺で多くみられる二次障害もなくなっている。

妻は外出先で初めてお会いした方にも、「私は再び歩けるようになります」と、よく決意表明をする。夜中にトイレに入ると、なかなか出てこない。聞けば、インナーマッスルを鍛えるためリハビリをしていると言う。黙々と努力する彼女は、私の手本であり良きライバルだ。再び手を繋いで外出するのが二人の目標だ。

居酒屋には私が車椅子を押して入り、席に着くと、妻が私の食事介助をする。胸から上は妻が、腰から

下は私が、それぞれ役割を分担する。「今日もまた、言葉がアー・アー・アー・アーになった」。言語障害のある私が、思いが伝わらなかつた時のもどかしさを妻に伝える際の言葉だ。電話の時などは代弁してもらい、彼女は時に私の口代わりにもなる。外出する時の着替えでは、まず私が膝をつき妻の靴下を履かせ、ズボンをはくのを手伝う。そこで立ち上がった私の上着のボタンを妻が止める。スムーズにいくと時間短縮になり、思わず笑みが出る。

妻は手を／私は足が／担当だ  
障害介護の／二人は楽し